



進修同窓会 HP にアクセス



男体山山頂 (上)

親鸞聖人が餓鬼を救い、
間宮林蔵が出世を祈願
したとされる立身石 (右)



筑波みやげ 2

1898 [明治 31] 年の夏休みに筑波山に出掛けた土中採集団一行は、飯田屋の番頭にはからかわれ、地域の人たちからは植木屋呼ばわりされた上に、植物採集でも、ドタバタを繰り返しました。その顛末を 1900 [明治 33] 年 3 月発行『進修第 1 号』『筑波みやげ』刀陽子 (理科岡田毅三郎先生) で迎っています。

引用文中の旧字体は新字体に改め、濁点については、原文のままの表記としました。

なお、引用文中の【 】は筆者による注記です。

八 刀陽子商夫に誤魔化さる

二日町西大久保の原に採集を試む、芝艸【芝草芝】氈【せん毛氈】の如きも緑陰涼を納【と】るべき所なし、苦熱金を礫【と】鑿【やく】の誤植【かし】一行渴に苦むこと甚だし、偶【たまたま】梨商の實【き竹かこ】を荷【にな】ふあり、刀陽子試みに其価を問へば曰く銭二個と、果小にして甚だ不廉、曰く銭三を与へよ『テンセント』【10 銭銭とセントを掛けている】を投ぜんと、彼れ潔く諾す、一行数を讀むに違【いとま】あらず忽ち『ナイフ』を施す、彼れ遽【あわた】だしく去りぬ、怪んで数ふれば銭二の割なり、刀陽子蒼皇不足を訴ふれば彼已に十数武【注1】の遠きに在りて、呼べとも応せず叫べとも答へず、聞かざるが如くにして過ぐ。」

【注1】武

ひとあし(一歩)の長さ。約三尺(約1m)。

数をよく確かめもせず梨に飛びついたので、よほど喉が渴いていたからなのでしょう。しかし、生徒はともかく、刀陽子先生までもが、数を数えていないとは。それに、逃げ去る梨売りの様子が怪しいと気づいたならば、数を確かめる前に、先ず呼び止めておくべきでした。それもせずに、梨にかじりついていたら、何とも残念な、情けない話です。

九 刀陽子再び脚疾に罹る

「刀陽子筑波に滞留すること数日、脚疾已に癒え神氣【しんき精神。氣力】爽然たり、山麓の採集未だ終りを告げざるも快晴に乘じ山巔【さんてん山頂】採集の意切なり、学生諸氏亦之を賛す、時恰も二時男体山巔に向はんとす、隣家の横山権平氏時已に遅し明朝を以て発すべしと切に止む【注2】、余等聴かずして発す、初め

沿道の採集を見合【みあわ】するの約なりしが、桜塚男女川到る所佳木奇草多し、覚えず胴乱に投せり、五軒茶屋に至る商夫已に帰装を治む、男体山頂に至る祠官【しかん神社に仕える神職。神主】已に賽銭を纏【まと】む、去て立身石の石窟に至り、鉄槌乱打時の移るを知らず、竹翠子五軒茶屋に在りて頻【しきり】に下山を促す、到れば商夫と共に余等を待つこと久し、曰く時甚だ遅し途中に於て日暮れんと、刀陽子平然たり、斯【かく】て一憩に暇あらず直に発す、商夫右転左躍巧に石間を走り殆んど猿の如く下山甚だ速なり、刀陽子疾駆奔走力を極めしも遂に追ひ付く能はず、独山中に残さる、男女川に至れば日全く暮れ、暗黒行路を弁せず、石确【せつかく】に躓倒【ちとう躓は、つまずく】すること数次、疲労身に加はり流汗滝の如く両脚棒の如く苦心惨憺殆んと因倒【困倒の誤植。困倒は、疲れ倒れること】せんとす、纒【わざか】に一風子に助けられて下山することを得たり、帰後腓腸筋【ひちようきん腓腹筋「ふくらはぎ」の筋肉】硬結して大に疼痛を起し、休養二日に互りて猶癒えず。」

【注2】時已に遅し明朝を以て発すべしと切に止む
当時は、ケールカーもロープウェイもなく、徒歩で登り下りするしかなかったため、この忠告となった。

筑波山鋼索鉄道線(通称は筑波山ケーブルカー)は1925 [大正 14] 年 10 月に、筑波山ロープウェイは1965 [昭和 40] 年 8 月に、それぞれ営業を開始した。

「鉄槌乱打」からは、刀陽子先生の熱中ぶりが窺えます。その熱心さが仇となり「暗黒行路」で惨憺たる目に遭うことになりませんが、ふくらはぎの筋肉痛ぐらいで済んだことは、不幸中の幸い、と言っべきでしょう。

十 平地の健脚者

「竹翠子軀幹【くかん体。体軀】強壯臂力【りよりよく筋骨の力。臂は、せばね】人に

過ぎ、常に二里余の遠きより通学し、校中第一の健脚を以て自慢す、筑波に来り採集団の一員となり、男体山に向ふて発す、桜塚を経て男女川に至る、山路碯碯【はんれい岩が露出した山道に、何度も躓倒して散々な目に遭った刀陽子先生は、「崎嶇(きき)を「碯碯」と敢えて表記したものとされる。崎嶇は山道の険しいさま】登山の勞平地を行くのに比に非らず、行く行く疲労身に加はり又平生の勇氣なし、五軒茶屋に至る横臥苦を訴へて前進を望まず、一風子は山間に長じ山路却て平地を行くに勝る、右往左転綽々【しやくしやくゆとりのあるさま。余裕綽々】として余裕あり、簸弄一番、曰く君何ぞ前進せざる男体山頂目眩【もくしように目と眩(まつげ)。極めて接近している所】の間にあると、竹翠子肯【がえ】んぜず、一風子肉薄して曰く君何ぞ平生の志に背くや君はこれ平地の健脚者なるかと、竹翠子苦笑して他を言はず。」

竹翠子は、筋骨隆々、体格も大きかったため、平地では健脚でも、山道では体重が負担になったのでしよう。それに反して、一風君は身軽で山登りも苦にならなかつたようです。一風君は、平地ではとても竹翠子に及ばないので、ここを先途と攻め立てています。

十一 当籤【あたりくじ】却て竹翠子の手にある

「男体山に登りし翌日、刀陽子再び脚疾起れるを以て休業となせり、偶陰曆盆の十五日に際す、近在の男女登山し町内景気を添へ白滝殊に雑沓【ざつとう雑踏】を極む、一同自宅にありて腊葉【せきよう押し葉。腊は、干し肉・干物】を整理し炊事を忘る、時正に一時、午餐【ごさん昼食】に当り残品寡少腹を充たすに足らず、一風子の議により饅頭を買ひて補ふことゝなしぬ、日々門前に来遊せる児童等皆白滝に遊び使价【しかい使い(价は、使用

人」を托すべきものなし、竹翠子自進んで曰く団員一同抽選を以て使价を定めんと、一風子も亦之を替す、刀陽子遂巡す、竹翠子窮追して止まず、刀陽子已むを得ずして応ず、竹翠子再び肉薄して曰く請ふ左証【さししょう(割符の左半分の意から証拠。証左)を得んと、刀陽子四面楚歌時事已に非なるを悟り、奮発一番曰く幸に当選の榮を荷はば一駆して商墨【墨は、とりで】(注3)を突かんと、約已に成る、竹翠子自ら紙籤【しせん籤は、くじ】を出す、刀陽一風各一を採る、ア、当か落か中原の鹿【注4]誰か手に落つか、堅睡【固睡】を呑んで開票せば、何ぞ凶らん当籤却て竹翠子の手に落ちんとは、刀陽子遽【にわ】かに意気軒昂となり膝屢【しばしば]進む、竹翠子愁然【しゅうぜん愁え悲しむさま】として弁疏【べんそ 言い開きをすること】喃々【なんなん 小声でくどくど言うさま】再籤を乞ふ、余等断固として応ぜず竹翠子勇を鼓し苦笑一番已むを得ずして発す。】

【注3] 商墨 商店。刀陽子先生は、自分は、城墨を攻め落とすよきな意気込みで商店に行く、という意味で商墨と言ったと思われる。
【注4] 中原の鹿 魏徴の詩「述懐の冒頭の「中原、還(ま)た鹿を逐う(中原を天下、鹿を帝位にたとえる)から、「中原、鹿を逐う」は、帝位を争う。転じて、重要なものを得るために競争する。こゝでの中原の鹿は、当たりくじ。】

炊事を忘れるほどに、採集植物の整理に熱中するとは、刀陽子先生、こればかりは横着者ではありません。しかし、その他のことは、自ら言うとおりの横着者であったようです。竹翠君は、その刀陽子先生を何とか動かそう、とくじ引きを納得させたまでは良かったのですが、自分が当たり籤を引くとは、投げたブーメランが自分に当たってしまいました。が、買い物役を決めるくじ引きでの3人のやりとりは、師弟関係というよりは、植

物採集仲間といった感じのもので、明治期の先生には、書生氣質が残っていたのでしよう。刀陽子先生を書生と見れば、その言行に納得がいきます。

十二 矢島君脚絆のはき方を説く

「水戸より矢島君来り、我採集団の士氣【しき 兵士の意気込み。集団で事を行う時の意気込み】大に振ふ、直に山頂の採集を約す、矢島君早朝旅宿を發して至る、余等未だ旅装を治むるに至らず、待つこと之を久ふす、偶竹翠子脚絆を失ひ刀陽子の「ゲートル」を穿【うが】つ、左結右合久ふして成らず、矢島君見るに忍びず、直に竹翠子の下に至り懇々指示するも遂に完【まった】からざりしかば、自【みづ】からの【他歩【地歩の誤植】を占むる高く頻りに製作の非誤を攻撃す、刀陽子傍に在りて一瞥【いちべつ ちらっと見る】こと】すれば何ぞ凶らん左具却【かえつ】て右脚に加ふとは、一転忽ち完きを得たり。」
竹翠君のゲートル騒動。矢島氏の親切心も、残念ながら、実を結びませんでした。「教練」が毎週2時間の必修科目となつた昭和期の土中生ならば、右と左とを逆にするなどの騒ぎは、起こさなかつたでしょう。

十三 一風子祠堂に叱り付らる

「山頂の採集女体山を先にす、一行相携へて東山より女体山に登る、弁慶七戻の辺に至る、危岩天に聳へ岩角崎つ【一時(そばだこの誤植)】所「ユハマツ【注5]多し、竹翠子は巧に岩上に攀ち【よち 登攀】巨獲ありしも一風子は路傍を採りて何の得る所なし、進んで大黒祠前に至れば「ユハマツ」地に敷きて祠下を粧【よそお]ふ、一風子大に喜び一躍探り去れば祠堂満面朱を注ぎて大に之れを叱咤す、一風子辟易【へきえき】す、刀陽子透【すか】

さず直に賽銭を投ず、祠堂莞爾【かんじにつこり笑うさま】として又咎めず。」

【注5] ユハマツ イワハツ。イワヒバともいう。岩上に生え、外見が針葉樹の枝、とくにヒバに似る、乾燥に強いシダ植物。

巨岩によじ登つた竹翠君、やはり運動能力は抜群であつたようです。一風君を叱り付けた神主さん、お賽銭の音を聞くや否や、笑顔を見せるとは、お賽銭の効き目は絶大です。

十四 石片左脛に飛ぶ

「刀陽子女体山頂に至り、鉄槌を振ふて閃緑岩【せんりよくがん】を採る、岩角堅ふして割るべからず、強打乱撃力を極めしに石片左脛に飛び、疼痛を感ずること甚だし、三角台【注6]に臥して休養之を久うす、一行発を促して已まず、僅に列後に殿【しんがり】して行くことを得たり、帰後襯衣【しんい 肌着】を解きしに黒痣【こくし 赤黒いあざ】麗々として数日を経て猶癒えず。」

刀陽子先生は、十字が刻まれた大石に横にちたようです。

刀陽子先生、採集となると、横着ぶりは消え失せて、脇目も振らず、夢中になつてしまいます。黒痣は筑波山神の祟りでしょうか。こればかりは、お賽銭の効用もなかつたようです。

十五 矢島君「パイプ」翁を困しむ

「五軒茶屋より男体山に登るの途中、一老翁の「パイプ」を嚮く【ひさぐ 売る】あり、矢島君就【おもむい】て数個を手にし製法を問ふ、翁奇貨措くべし【注7]と阿諛【あゆ おもねりへつらうこと】甘言親しく樹木を示せしに、遂に一個をも取らずして去る、翁喜ばず、君忽ち林中に入りて該樹を索【もと]め、行く行く「パイプ」を製す。山頂を下る此ほひ半ば已に成る、帰路翁に指示して、曰く翁や斯【かく】の如しと自製の「パイプ」を示し、喜色面に溢る、翁佛然【ふっせんむつとするさま】として一言をも発せず。」

【注7] 奇貨措(居)くべし 【奇貨は、珍しい品物。珍しい品物には将来値が付き、儲かるから買っておけの意から、到来した絶好の機会を逃す手はない、おおいに利用せよ、ということ。】

老人が売っていたパイプは、どのようなものだったのでしようか。矢島氏が登山の最中に作つてしまうようなものですか、大した品ではありません。買う人も少なかつたでしょうが、材料費はタダですから、商売にはなつたのでしよう。「久しぶりの客、チャンスだ」と思つて、愛想を振り撒いたのに、とんだ結果になつて、よほど腹立たしかつたのでしよう。「ゲートル」では失態を演じた矢島氏ですが、パイプを自作するとは、手先はかなり器用であつたようです。



女体山山頂の三角点 (手前の石の上)

【注6] 三角台 写真の三角点標石は、1899(明治32)年に設置されたもので、それ以前の三角点は、1878(明治11)年に内務省地理局が「山頂固有ノ大石ニ定規ノ十字形を彫刻セシム」でした。